学園だより
名古屋電気学園
愛知工業大学
愛知工業大学情報電子専門学校
愛知工業大学名電高校
愛知工業大学附属中学校

目次:

後藤鉀二賞	2
東南大学長来園	3
学生が人形制作	4
防災マイスター	5
卒業式・大学等	6
卒業式・ACE等	7
日中卓球大会	8

発行所
名古屋電気学園
〒470-0392
豊田市八草町八千草1247
TEL(0565)48-8177

社会に役立つ“ものづくり”取り組みを

理事長、年度始め式で大震災踏まえ呼びかけ

名古屋電気学園は四月一日、愛知工業大学八草キャンパス（豊田市八草町）の学園本部棟などで年度始め式、辞令交付式等を行いました。また、同日付で組織変更と人事異動も併せて実施し、新年度のスタートを切りました。後藤淳理事長は、年度始め式で大災害を引き起こした東日本大震災を踏まえ、教員らに「社会に役立つ“ものづくり”に取り組むと共に学生も育ててほしい」と呼びかけました。

年度始め式で、世界に通用する“ものづくり”に取り組もうと話す後藤淳理事長

八草キャンパスの10号館で行われた年度始め式で、挨拶に立った後藤淳理事長は三月十一日に起きた東日本大震災とそれに続く原発事故に触れ「被災者を助けようという気持ちや“元気を出そう”という掛け声もなんとなく自粛に押されてしまっている」と、復興のために逆に“元気”を出そうと説きました。さらに、今回の様な大災害で本学の果たすべき役割について、「こういう時こそ、工学部を主体とする本学が、社会に役立ち、世界に通用する“ものづくり”に取り組むと共に、そうした学生も育て、社会へ送り出してほしい」と呼びかけました。

続いて後藤泰之学長が挨拶し、「本年は、大学開学から五十年余にわたり培ってきた“ものづくり”教育の伝統を、今以上に充実、発展させる方向性を含め、じっくりと腰を据えて検討していきたい」と述べたうえで、「大震災の復興という日本再スタートに役立つ若者を育てていかなくてはなりません。また、私学を取り巻く状況は厳しく、震災で大幅な私学助成カット等も見込まれることから、今以上に教職員が一丸となり、乗り切っていきましょう」と、呼びかけました。

日本再スタートに役立つ若者を育てようと話す後藤泰之学長

この後、新規採用及び昇任各教職員の紹介がありました。また、大学の研究、教育振興、学生の指導等の各分野で貢献した教職員に贈られる「平成二十二年度学長賞」の表彰が行われました。受賞者は、手嶋紀雄工学部応用化学科准教授、中井孝幸同部建築学科准教授、水野一平基礎教育センター課長。後藤泰之学長が壇上で、三氏に学長賞を贈り、称えました。

右から小嶋副学長、中井、手嶋各准教授、後藤泰之学長、水野課長、稲垣副学長

後藤淳理事長年度始め式の挨拶要旨

暖かかった昨年と違い今年は寒いうえに、未だかって経験したことのない巨大地震により（東北、関東地方が）大災害に見舞われました。日本中で「被災者を何とか助けなくては」という気持ちがあっても何も動かない状態です。地元の自動車メーカーも部品がそろわないため生産できないなど、経済もひどい状況です。「元気を出そう」の掛け声も出るのですが、自粛ムードに押されてしまっています。

こういう時こそ、工学部を主体としてきた本学の教員の皆さんには、社会で役立ち、世界に通用する“ものづくり”に取り組んでほしい。被災地で活躍するアメリカの無人偵察機等もそうですが、ノーベル賞も新しい発見より、それが世界でどれだけ役立つかで、評価されるようになってきたことを頭に入れて、“ものづくり”を考え、学生も育てていただきたいと思います。

日本人は、他の国と違って大災害等の時に力というか団結力を発揮します。それらに期待し、早く元へ戻ってほしいというのが、私の気持ちです。

小西貴之・愛工大名電高校フェンシング部監督に平成22年度後藤鉀二賞

後藤鉀二先生奨学記念会（会長・後藤淳理事長）は「平成二十二年度後藤鉀二賞」を小西貴之監督（若水事務部事務職員）＝写真右＝に贈ることを決め、一月二十二日に愛工大八草キャンパス内の学園本部棟で授賞式を行いました。

小西監督は、平成二十二年度全国高校総体（インターハイ）・フェンシング競技学校対抗男子の部（昨年八月、沖縄県で開催）で、十五年ぶり十度目となるフェンシング部の全国優勝を成し遂げ、さらに部長の川嶋範夫教諭（平成七年、後藤鉀二賞受賞）とともに毎年、多数の部員を大学に進学させた功績が認められ、選ばれました。

小西監督は平成十七年、愛工大経営情報科学部を卒業後、学園に勤務、十九年フェンシング部コーチ、二十一年一月から監督を務めています。監督自身も、愛工大名電高フェンシング部員だった平成十二年、フルーレで全国選抜大会優勝をしています。

授賞式では、出席者全員が後藤鉀二前理事長の遺影に黙とう。この後、後藤淳理事長が小西監督の功績を称え、賞状と賞牌等の記念品を贈りました。続いて、小西監督が「大変素晴らしい賞をいただき光栄に思っています。（来年の）百周年の時に全国優勝というううれしい報告が出来るよう、これからも部員とともに日日精進に努めます」と、力強く謝辞を述べました。

後藤淳理事長から「後藤鉀二賞」を贈られる小西貴之監督

学園創立100周年関連

学園創立100周年を記念し若水キャンパスに記念館建設

学園は平成24年11月までに、創立100周年記念事業として若水キャンパス（名古屋市千種区若水）に、「名古屋電気学園100周年記念館」（仮称）建設など、各記念事業を実施します。

計画によると、メーンの記念館は、メモリアルホールを中心に100周年に係わる資料など展示予定のメモリアルギャラリー、吹奏楽部の練習場兼記念ホール、専門学科実習室からなる「ものづくり実習エリア」などで構成されます。このほかに大学のキャンパス整備・充実ほか各設置校の情報機器、教育・研究設備の充実や奨学金の充実なども行います。

学園は、記念事業の費用の一部を募金で充てることにし、現在、募金事務局を窓口に募金活動を行っています。詳細は、下記の通りです。

「学園創立１００周年記念募金」について

平成24年に学園創立100周年を迎えるにあたり、下記のとおり記念の募金事業を開始しましたので、お知らせします。教職員の皆様からの募金につきましては、後日、あらためて詳細をお知らせしますので、ご協力のほどお願いいたします。

募金要項

募金目標額　10億円

次の100周年記念事業の費用の一部に充当させていただきます。

- 名古屋電気学園100周年記念館（仮称）建設
  - ※ 若水キャンパスの南側敷地に、平成24年完成予定で建設
- 大学八草キャンパスの整備・充実
- 設置校の、情報機器等、教育・研究設備の整備・充実
- 奨学金制度の充実

寄付金の種類　(1) 法人を対象とするもの
一口の金額は特に定めておりません。
(2) 個人を対象とするもの
一般篤志家、同窓生、教職員等　1口1万円
在学生の父母　1口5千円

募金期間　平成25年8月31日まで

易紅・東南大学学長ら代表団が来学

―本学に留学中の学生とも歓談―

歓談の後、にこやかに易学長と握手する後藤淳理事長㊨

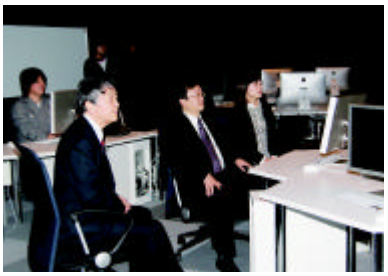
愛工大と姉妹校の中国・東南大学代表団が二月二十四日、八草キャンパスを訪れ、今後の学術交流などを話し合いました。

東南大代表団は易紅学長ら六人。本部棟一階正面玄関で職員の拍手の中、後藤淳理事長、後藤泰之学長と握手を交わした後、理事長室で歓談。後藤淳理事長が「学園は来年、創立百周年を迎えます。式典にぜひおいでください」と歓迎の言葉を述べると、易学長は、「理事長先生が、長年にわたり日中交流に尽くした功績は忘れません。式典には必ず出席します」と、にこやかに応えていました。

引き続き、本部棟内の会議室で後藤泰之学長ら本学幹部と話し合い、後藤泰之学長が、▽今後の交流促進のため既にある各種交流協定を包括した「学術交流協定」（仮称）の締結▽東南大学の学生寮などを活用した本学からの短期留学生の派遣―などを申し入れました。易学長は「既に本学の学生が日本ビジネスコースで学んでおり、学生は講義内容、生活面で満足しています。愛工大からの申し入れには、協力を惜しみません」と述べ、早急に両大の担当部署で詰めていくことになりました。

両校交流を含む話し合いの後、握手を交わす易学長と後藤泰之学長㊨

代表団は昨年、開設した1号館にも足を運び、国内最高級レベルの3DCG制作設備などを誇る情報科学部を中心に見学。また、自由ヶ丘キャンパス（名古屋市千種区）でも施設を視察し、会議室で経営学部日本ビジネスコースで学ぶ留学生三人と日本での勉学、生活などについて懇談しました。



新「1号館」の情報科学部の施設を見る易学長（右から2人目）

本学と東南大（南京市）の両校は一九八〇年に姉妹校提携を締結して以来、毎年、両校の教職員、学生各代表団が相互訪問をしています。

姉妹校締結三十周年を迎えた昨年九月、東南大で後藤泰之学長を団長とする本学代表団のほか、学生代表団も出席し、記念式典が行われました。

学内企業展盛況

名古屋電気学園の後援会組織「学校法人名古屋電気学園愛名会」会員企業三百八十一社による「平成二十三年学内企業展」が二月十八、十九日の両日、愛工大八草キャンパスの鉄徳館で開かれ、二日間で延べ三千二百三十三人の学生が参加しました。

企業展は毎年、キャリアセンター、愛名会が来春卒業予定の本学、愛工大情報電子専門学校の三年生、大学院一年生らを対象に企業情報、求人状況等の就職情報収集の場になれば―と開催。両日とも朝早くからリクルートスーツ姿の学生が列をつくり、開場と同時に各企業のブースを回り、人事担当者から事業内容、待遇、採用見通し、求める人材等の説明を受けていました。どのブースも席の空く時がないほどで、立ったまま学生も見られ、熱気に包まれていました。

学部や専門学校の教員も会場内を回り、学生の相談に応じ、各企業の人事担当者らと情報交換を行い、学生の支援に汗を流していました。初日の午後には、愛名会名誉会長の後藤淳理事長も訪れ、会場内を見て回りました。

また、Uターン希望の学生向け交流会も二月二十一日～二十八日まで、三重県（会場・四日市都ホテル）を皮切りに静岡、岐阜の順で行われたほか、一般企業対象の企業展なども八草キャンパスで開かれ、いずれも盛況でした。

熱気に包まれた学内企業展。学生で埋まった会場㊨と企業ブース㊤

競う

本学客員教授のからくり人形師の手ほどきで

学生が「からくり人形」を制作

作り方を学生に指導する、からくり人形師の玉屋客員教授

愛工大の学生が二月二十二日～二十五日、八草キャンパス内にある「みらい工房」で、客員教授のからくり人形師・玉屋庄兵衛氏の指導を受けて「からくり人形」づくりに取り組みました。

玉屋客員教授の担当する「ものづくり文化実習―玉屋庄兵衛のからくり人形制作―」（担当・森豪総合教育教室教授）を受講した二～四年生十三人が、その締めくくりとして、「からくり人形」を制作。人形は、祭りの山車で使われている「采振り人形」で、学生は玉屋客員教授やお弟子さんからノコギリなど道具の扱い方、木の削り方を教えられながら、人形の顔や手足の制作に挑戦しました。学生が苦労していたのは顔の作りで、玉屋客員教授らの手を借りて何とか仕上げました。

最終日の二十五日は、からくりに欠かせない顔、手足を動かすための紐を通して完成させました。その後で、玉屋客員教授が手足の動きなどを一点ずつ審査した後、「この経験を忘れずに、今後の勉学などに役立ててください」と講評。最後に自分の作った人形を手に、玉屋客員教授、森教授やお弟子さんを囲み、記念の写真を撮りました。

森教授の話では、国内の大学で学生がからくり人形師の手ほどきで「からくり人形」を制作する授業は珍しい―ということです。

制作した「采振り人形」を手に玉屋客員教授（前列右から3人目）、森教授（同4人目）を囲み、記念の写真を撮る受講生の学生

高校では生徒がロボットと合唱で競う

愛工大名電高校で専門学科1年生のロボットコンテスト、普通科1年生の合唱発表会が2月17日、喬徳館と愛名館を会場に開かれ、授業で製作したロボットや放課後の練習の成果を競い合いました。

【ロボットコンテスト】

チーム（1チーム各3～4人）に分かれた生徒が、工業技術基礎の授業で作ったセンサーロボットを走らせ、熱戦を展開。競技は、決められたコースをスタートからゴールするまでの時間で競いましたが、途中の障害物でコースを外れたり、エンストするロボットもあり、生徒を一喜一憂させていました。予選を突破した20チームが決勝で対決、見学の生徒も加わり応援にも一段と力がこもり、会場の愛名館は熱気に包まれていました＝写真右。

上位成績チームは、以下の通りです。（敬称略）

①ＵＲＬ（柴垣圭汰、伊吹賢也、石塚祭、新矢竜）②プリティー花ちゃん③ＴＨＥ　ＨＡＳＥＧＡＷＡ

【合唱発表会】

生徒でつくる合唱委員会が中心となり、練習時間の割り振り、当日の進行まで務めるという“生徒手づくり”の発表会。当日は喬徳館を会場に、各クラスが練習の成果を館内いっぱいに響かせました＝写真右。他のクラスの生徒の歌を聴き、その成果を称えるのも目的の一つから歌い終わる度に、大きな拍手を受けていました。

成績は以下の通りです。（敬称略）

合唱　▽金賞　A組（平和の鐘）＝写真右▽銀賞　G組（君と見た海）▽銅賞　B組（時の旅人）▽指揮者賞　川田明優（A組）▽伴奏者賞　青山美月（H組）

連携

社会人の防災専門家養成を目指す

―社会人防災マイスター養成講座発表・修了式―

愛工大は他大学や官公庁、企業と連携した開発・研究事業、社会人講座など通して社会や産業界との結びつきを深めています。東日本大震災で、急がれる社会人の防災専門家養成を先取りした「社会人防災マイスター養成講座」のほか、一定地域内の電力の自給自足を可能にする産学官による「次世代型電力供給システム開発」を紹介します。

「平成二十二年度秋期社会人防災マイスター養成講座研究発表・修了式」が二月一日、愛工大・本山キャンパス（名古屋市千種区）で行われました＝写真右。

同講座は社会人を防災専門家に養成する目的で、文部科学省の平成二十年度戦略的大学連携支援事業に採択された愛工大のほか名工大、大同大、豊田高専四校提案の「工科系コンソーシアムによるものづくり教育の拠点形成」推進事業の一つです。定員は十人で、受講期間は一年。受講生はこの間、本山キャンパスでの講義、自宅、会社でも受講できるeラーニング、企業視察を含むフィールドワーク等を通し、広く防災全般について学びます。

この日の研究発表には、一年間の講座を修了した平成二十二年度前期講座受講生や昨年十月から始まった秋期講座受講生、講座OBや講師が出席。前期講座の受講生による個人、グループの両研究発表があり、打田憲生氏ら受講生十人（うち一人が海外勤務のため欠席）が、企業の従業員安否確認システム構築、快適避難所づくりの取り組み、身近な危険地域の調査・研究等をテーマに受講成果を披露しました。秋期講座の受講生も中間発表を行いました。

引き続き、修了式が行われ、本学講座代表者の正木和明地域防災研究センター長（都市環境学科教授）、曽我部博之・戦略的大学連携室室長（建築学科教授）が、「社会人防災マイスターとして活躍されることを期待しています」と挨拶。受講結果等を基に受講生の中野勝良氏に最優秀賞、打田憲生、古市憲彦の両氏に優秀賞、残り全員に奨励賞と記念品のAIT防災マイスターのネーム入り帽子を贈りました。

後日、受講生に学校教育法に基づく「履修証明書」を交付します。四月受講生の募集は停止しますが、秋にリニューアルして再開することにしています。

受講生と講座代表者の正木センター長（前列右から4人目）、曽我部室長（同3人目）らとの記念撮影

次世代型電力供給システム開発目指す

産学官一体のプロジェクト研究成果報告

愛工大・エコ電力研究センターは二月二十一日、八草キャンパス内で平成十八年度に文部科学省の私立大学高度化推進社会連携事業に採択されたプロジェクト研究「マイクログリッド導入による次世代型電力供給システム開発」の成果報告会を開催しました。

報告会は、産学官一体で開発・研究を進めてきたプロジェクト研究が本年度で事業終了となるのを受け、開発・研究成果を知ってもらう目的で行われました。「マイクログリッド」は、太陽光、風力などの地球温暖化抑制につながる様々なクリーンな自然エネルギーを利用し、一定地域内の電力の自給自足を可能にするシステムです。

プロジェクト研究のために開設されたエコ電力研究センターは、八草キャンパス内に太陽光や風力発電装置などを設置し、自治体、企業と連携し環境調和型の電力供給システムの開発・研究を推進してきました。

報告会では、一柳勝宏センター長（電気学科教授）の挨拶に続き、雪田和人電気学科准教授が「プロジェクト概要・本学マイクログリッド説明」と題して発表したほか、瀬戸市環境課の加藤守幸氏の「エネルギー消費原単位に関する考察」など開発・研究に携わった各自治体、企業、本学大学院生から成果報告がありました。まとめで、雪田准教授は開発・研究が一部実用化、特許申請など具体的な成果を挙げたと述べ、一柳センター長も研究継続を明らかにしました。五月に文科省への最終報告書をまとめる予定です。

大学教員、自治体、企業から開発・研究成果の発表があった成果報告会

各設置校卒業式―新しい世界へ羽ばたく

愛工大（豊田市）、愛工大名電高（名古屋市）など学園各設置校で三月、卒業式があり、卒業生が慣れ親しんだ学舎を後に巣立っていきました。姉妹学園の愛和学園都市デザインカレッジ愛知は、今回の卒業式をもって休校となるため卒業生、教職員とも感慨深げでした。

愛工大

三月二十三日、八草キャンパスの鉾徳館（講堂兼体育館）で行われ、千三百十六人が晴れの日を迎えました。工学部九百四十二人、経営情報科学部二百七十四人、大学院修了者で博士前期課程九十三人、博士後期課程を修了して論文審査に合格、博士になった七人です。

本学管弦楽団の「祝典行進曲」の演奏で始まった式典では今回の東日本大震災で亡くなった人に黙とうした後、後藤泰之学長が博士一人ひとりに博士の学位記を、博士前期課程の代表に学位記、学部の代表に卒業証書・学位記をそれぞれ授与しました。続く式辞で大震災に触れ、「大災害にあった被災地の一日も早い復旧に出来る限り協力していかなければなりません」と述べた後、卒業生に「皆さんは本学のモットーである『創造と人間性』を胸により研さんを積み、各分野で活躍しこの国の発展に寄与することを心から願っています」と、卒業生を激励＝写真右。後藤淳理事長・総長も「日本は今、千年に一度という大震災に見舞われ、深刻な状況にあります。こうした時こそみんなで助け合う、そして人を思いやる気持ちを忘れないでほしい。また、卒業生の皆さんは、来年、創立百年を迎える学園の一員という誇りと自信を持ち、日本再生のために活躍されることを期待しています」と挨拶しました＝写真右。

成績優秀者に学園賞、瑞若（同窓会）賞、後援会賞の三賞が贈られ、最後に卒業生を代表して杉浦文彦君（機械学科）が「大学で学んだ知識や友らと共に培った人間性、創造性を活かし社会の各分野で努力、活躍したいと思います」と、謝辞を述べました。

会場周辺ではサークル・クラブの会員らが、式を終えて外へ出てきた先輩を何度も胴上げし、花束を贈って卒業を祝福。キャンパスの校舎を背景に記念写真を撮り合う卒業生の姿が、終日、絶えませんでした。

卒業生を代表し謝辞を述べる杉浦文彦君

愛工大名電高校

三月一日、校内の喬徳館で行われ、佐藤忍校長が科学技術科、情報科学科、普通科（計六百三十九人）の各科代表に卒業証書を授与したのに続き、「皆さんには▽人生は一生が勉強▽誠実に生きる▽報恩と感謝の気持ち―の三つを心がけ、これからの長い人生、大いに夢を抱き、創造的であってください」と、式辞を述べました。この後、後藤淳理事長が「来年創立百周年を迎える学園の一員という誇りと自信を胸に、新しい社会で活躍されることを願っています」と励ましの言葉を贈りました。

全国優勝したフェンシング部の高阪一世君らへのクラブ功労1号賞贈呈など学校、PTA会長、同窓会各賞の表彰に続き、在校生を代表し大屋えりさん（二年生、普通科）が「きらめく未来をつかんでください」と卒業生を祝福。それを受けて中井佑樹君が、「本校で友と学び、友と過ごした日々の思い出を胸に今後も前進していきます」と答辞を述べました。

教室では担任の先生がギターを手に歌のプレゼントや激励の言葉で卒業生との別れを惜しむ一方、校庭では後輩が先輩の卒業生に花を贈ったり、胴上げなどをして祝う光景が見られました。

誠実に生きるなどを卒業生に説く佐藤忍校長

今後も前進していきますと誓う中井佑樹君

愛工大附属中学

三月十八日、喬徳館で行われ、百人が新しい一歩を踏み出しました。最初に、十一日に起きた東日本大震災で亡くなった人に対し、黙とうした後、佐藤忍校長が卒業生代表の青山渚さんに卒業

未来を担うのは皆さんと述べる後藤淳理事長

答辞で友人の大切さを強調する北川弘之君

証書を授与。「次の高校三年間でやらなければならないことや、やろうと思ったことに挑戦し、青春の情熱を限りなく燃焼させ、はつらつとした人間に成長するよう期待しています」と式辞を述べました。後藤淳理事長は東日本大震災にふれ「こうした時こそ、みんなで助け合い、人を思いやる気持ちを忘れないでください。学園は来年、創立百周年を迎えますが、その後の世界をどうするかは皆さんの肩にかかっています」と激励。

卒業生代表の北川弘之君が在校生代表の可児美月さんの送辞に対し、大震災の被災者へ「震災に負けず希望を持ち続けてください」と励ましの言葉をかけ、後輩に「学校生活で“苦難”という壁に必ず直面しますが、そんな時、一番の支えになってくれるのは“友だち”です。友だちを大切に絆を深め合ってください」と、呼びかけました。

愛工大情報電子専門学校

三月十六日、豊田市の同校で行われ、式に先立って東日本大震災の犠牲者に黙とうをしました。この後、卒業式を最後に学校を去る白岩義夫校長が四十六人の卒業生代表山田翔太君（CAD・CAM学科）に卒業証書を手渡し、「IT社会の中心的担い手となるため、何事にもチャレンジする気持ちと人間関係をスムーズにするコミュニケーション能力を高め、大いに飛躍してください」とお祝いの言葉を述べました。後藤淳理事長は「皆さんは来年創立百周年を迎える学園の一員という誇りと自信を持ち、社会に立ち向かってください」と励ましの言葉をかけました。

大いに飛躍をと校長として最後の式辞を述べる白岩義夫校長

日々努力を重ね成長し続けますと、決意を語る伊藤慶則君

鈴木公平市長の祝辞（鈴木辰吉産業部長代読）に続き、伊藤慶則君（情報工学科）が磯村義安愛知県専修学校各種学校連合会会長、市川佳希同窓会長ら来賓、保護者の見守る中、「様々な困難にぶつかっても本校の卒業生という自覚と誇りを持ち、日々努力を重ね、成長し続ける覚悟です」と謝辞を述べ、式を終えました。

姉妹学園

学園と姉妹学園の愛和学園・都市デザインカレッジ愛知、あいわ幼稚園でも卒業、卒園式が行われました。

都市デザインカレッジ愛知

三月八日、春日井市の同校で行われました。卒業生は測量科など二十七人。今年四月から休校となるため大根義男校長が卒業証書等などを授与した＝写真右＝後、式辞で休校の経緯など説明し「市が安心して暮らせる社会環境構築のため、高いモラルをもって仕事に従事してください」と、卒業生を激励。また、経営母体の後藤泰之愛和学園理事長（愛工大学長）も、「本校は今年度でその教育活動を一時中止することになりましたが、これまで諸先輩の築き上げてきた本校の輝かしい歴史はけっして色あせません」と、力強く挨拶しました。卒業生代表の西村拓君（測量科）が、「本校で学んだ知識と経験を基に、有能な人材として社会に貢献できるよう、さらに精進していきます」と謝辞を述べました。

あいわ幼稚園

第四十五回卒園式が三月十九日、名古屋市名東区の同園内で行われ、式の前に全員で東日本大震災の犠牲者に対し黙とうしました。

この後、後藤泰之園長（愛工大学長）が卒園児一人ひとりに修了証書を手渡し、「東北地方で大きな地震が起き、大勢の人が困っています。こうした人たちへの思いやりの気持ちを忘れないでください。そして社会で役立つ人になってください」と、お祝いの言葉を述べました。

来賓の後藤淳名古屋電気学園理事長からも祝辞があり、式に花を添えました。卒園児らは「お世話になりました」、「さようなら」と大きな声で、感謝と別れの言葉を述べ、式場を後にしました。

後藤泰之園長から修了証書を手渡される卒園児

ピンポン外交40周年記念

日本中国親善卓球大会

後藤鉀二先生の写真、「祝ピンポン外交40周年友好試合」の横断幕の下、日中両チームの選手が出席しての開会式

日中両チームの選手が40年前のピンポン外交に思いをはせながら、親善と交流の輪を広げたピンポン外交40周年記念日本中国親善大会

米中、日中国交正常化の道筋をつけた「第31回世界卓球選手権大会」開催から40周年を記念した「ピンポン外交40周年記念　日本中国親善卓球大会」が4月10日、ゆかりの地の愛知県体育館（名古屋市）で開催されました。

「世界卓球選手権大会」は1971（昭和46）年3月、愛知県体育館を会場に行われ、当時、日本卓球協会会長で名古屋電気学園理事長・愛工大学長だった後藤鉀二先生の尽力で、国交のなかった中国選手団の参加が実現しました。この参加をきっかけに米国選手団の中国招待、そして翌年のニクソン米国大統領、田中角栄首相の訪中に繋がり、最終的に米中、日中国交正常化へと進展したため、これらをまとめて「ピンポン外交」と言われています。

今回の卓球大会は中国駐名古屋総領事館、愛知県日中友好協会の主催で、日本から30チーム、日本在住の中国から10チームの計40チーム、160人が参加。観覧席に花で飾られた後藤鉀二先生の写真＝写真右＝を前に開会式があり、松原暁美大会委員長（愛知県卓球協会副会長）の開会宣言に続き、主催者を代表して愛知県日中友好協会会長・愛知県卓球協会会長の後藤淳理事長が挨拶。米中、日中国交正常化をもたらしたピンポン外交を中心に、「若い人は知らないかもしれませんが、この体育館がその舞台となり、日中交流の中心となったのは卓球だったことを忘れないでほしい」と話しました。この後、愛工大卓球部の北村祐馬選手と中国・李萌選手（岐阜・朝日大学卒）のエキジビションゲームがあり、引き続き、10グループ（各グループとも中国1チームを含む4チーム）に分かれて、熱戦を繰り広げました。試合には、鄭祥林・中国駐大阪総領事、張立国・駐名古屋総領事のほか、かつての世界チャンピオン、何智麗（日本名・小山ちれ）さんら往年の名選手らも参加して大会に花を添えました。

開会式で挨拶する後藤淳理事長

また、大会後、市内のホテルで開かれた「ピンポン外交40周年記念会」には程永華中国大使、大村秀章愛知県知事、河村たかし名古屋市長、豊田章一郎トヨタ自動車名誉会長らが顔をそろえ、大会の盛会を祝いました。

愛名会だより

平成23年度総会開催

愛名会は五月十三日、平成二十三年度総会を名古屋市中区栄の名古屋東急ホテルで開催します。

愛名会は、学校法人名古屋電気学園の後援会組織です。現在の会員数は法人会員六百六十九社、個人会員三百一人。毎年、大学内で企業展を開催しています。

総会では理事会に続き総会を開催し、平成二十三年度事業計画、予算の報告等に続いて講演があります。今回は、岡本一雄トヨタ自動車取締役副会長が「次世代自動車の将来展望」と題して、話します。

編集後記

▼今の日本の状況を端的に“国難”という人もいます▼三月十一日に東北地方の太平洋沿岸地域を襲った東日本大震災。特に想像を超えた津波により三陸海岸沿いの市町は壊滅的な打撃を受けました▼その災害に追い打ちをかけたのが福島県内の原発事故です。終息宣言はいつ出るか全く不明な中、広がるのが避難地域と風評▼一番の犠牲者は、被災者です。避難場所を転転とし収まらない余震に怯える日々が続きます▼安全な場所で、ゆっくり手足を伸ばし、休ませてあげたいと思わずにいられません▼東海地方は被害もなく、東日本大震災をどこか遠い所の話としか、みてない人もいるのではないでしょうか▼しかし、私たちは「明日起きても不思議ではない」と言われる東海大地震の中で生活していることを忘れてはならないと思います▼有名な「天災は忘れた頃に来る」の警句があります。災害から生命、財産を守るため、忘れてはならない言葉です。（久）